

## 釧路地方の擦文土器について

松 田 猛<sup>\*</sup>

### Notes on the Satsumon Potteries of the Kushiro District

Takeshi Matsuda

#### I

釧路地方に擦文期の遺跡が濃密に分布していたことは、これまでの調査によって明らかにされて来ている。例えば、釧路湿原周辺に擦文期の遺跡は86ヶ所確認されている(西・澤 1975)。また、河川や海岸線に沿って少なからず分布することも知られている(澤・西 1979、他)。

これら擦文期の遺跡は、澤四郎を中心とする人びとによって調査が進められて来た。調査報告の刊行されている遺跡は次の通りである。

阿寒町殉公碑公園遺跡(澤他 1963)

〃 下仁々志別遺跡(澤他 1965)

白糠町和大別遺跡(富水 1968 a 1968 b 1969)

〃 刺牛チャシコツ(富水 1968 c)

釧路市東釧路遺跡(澤・宇田川 1969)

音別町ノトロ岬遺跡(富水 1970)

〃 チノミ遺跡(富水 1970)

弟子屈町下鎚別遺跡(澤・宇田川・豊原 1971)

釧路市緑ヶ岡 S T V 遺跡(澤編 1972)

厚岸町下田ノ沢遺跡(澤他 1972)

釧路市貝塚町1丁目遺跡(澤・西編 1974)

〃 北斗遺跡(澤・西編 1975)

弟子屈町矢沢遺跡(澤・松田編 1977)

釧路市興津遺跡(澤編 1979)

これらの内、竪穴住居址が調査された遺跡は、下仁々志別、和天別、東釧路、ノトロ岬、チノミ、下鎚別、緑ヶ岡 S T V、下田ノ沢、貝塚町1丁目、北斗、矢沢などで50軒近くを数え、その他未報告例を加えると50軒を超える住居址が発掘されている。

しかし、資料として得られた擦文土器の数量はそれほど多くはない。これは、緑ヶ岡 S T V 遺跡や東釧路遺跡などの様に擦文期の終末頃に位置づけられ、土器が他の利器(鉄器や木器など)に置き換えられつつある時期にあたるからだろう。東釧路遺跡で調査された3軒の内1軒は「竈を使用せず土器を持たない近世アイヌ期の竪穴」(澤・宇田川 1969)と指摘されている。同様の例は、

釧路村昆布森中学校裏遺跡で検出された4軒がある(山本編 1977)。このことから、地表観察で、擦文期とされている竪穴の中に、過渡期もしくはアイヌ期の竪穴が含まれていることが考えられよう。

近年、擦文土器については、幾つかの編年的研究がある(東大 1964、石附 1968・1969、菊池 1970、佐藤 1972、藤本 1972、宇田川 1979)。以上の編年に対し、釧路地方の土器については、西幸隆・澤四郎らによって次の様な対比がなされている(西・澤 1975)。

「釧路地方の擦文式土器は、古式の擦文式と末期の擦文式の二つのグループに分けられる。それらは、菊池徹夫(1970)の編年に従えば、擦文Aまたはブレ擦文とD・Eに当り、佐藤達夫(1972)によれば、IIとIVとなり、藤本強(1972)のいうa、b類とh、i、j、k、l類に比定できる。」と。

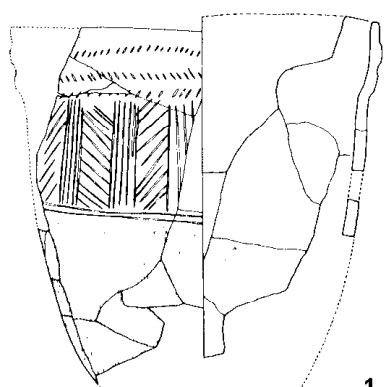
ところで、釧路市埋蔵文化財調査センターには、未公表資料も含めてかなりの擦文土器が収蔵されている。現在、整理途中の段階にあるので詳述できないが、これまでに作図した19点を紹介し、併せて釧路地方の擦文土器について整理しておきたい。なお、図示した土器には釧路地方以外の出土例も含まれていることをお断りしておく。

#### II

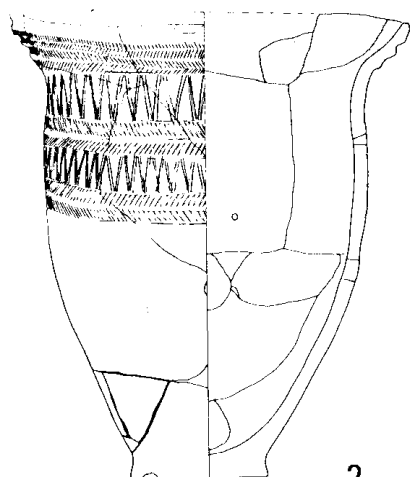
1は、釧路市丸松(北斗遺跡第8地点)出土である。口縁部及び胴部の過半と底部を欠損している。口径17.3cm。口縁部は、頸部でやや変化してほぼ垂直に立ち上がり、2段の低い隆起帯がめぐられ、刺突文例が3段施されている。胴部の文様は、4～6本を単位とする縦沈線及び斜行する沈線を施し、下縁は2条の横走沈線によって区画されている。器面の色調は、褐色もしくは黒褐色を呈し、縦方向のへう磨き整形痕が観察される。裏面上部は横、より下は縦方向に整形されている。

2は、釧路市緑ヶ岡遺跡出土である。高さ21.6cm、口径18.8cm、底径6.4cmの大きさを計る。口縁部は外反し、

\*釧路市埋蔵文化財調査センター

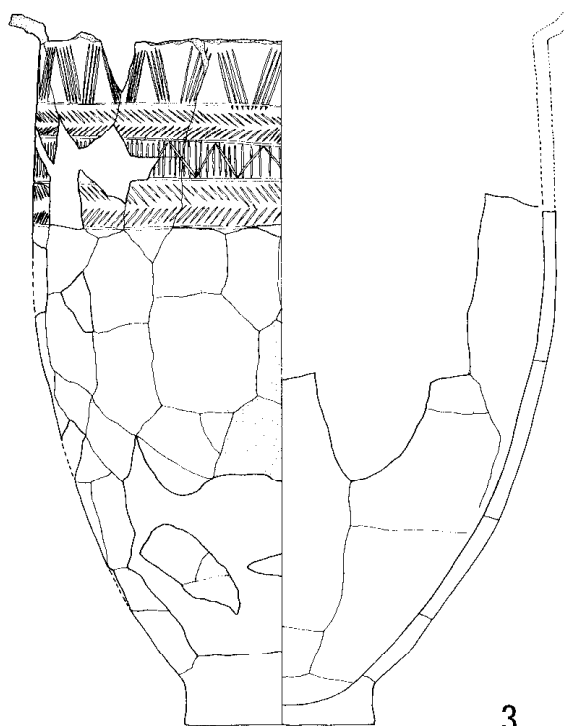


1

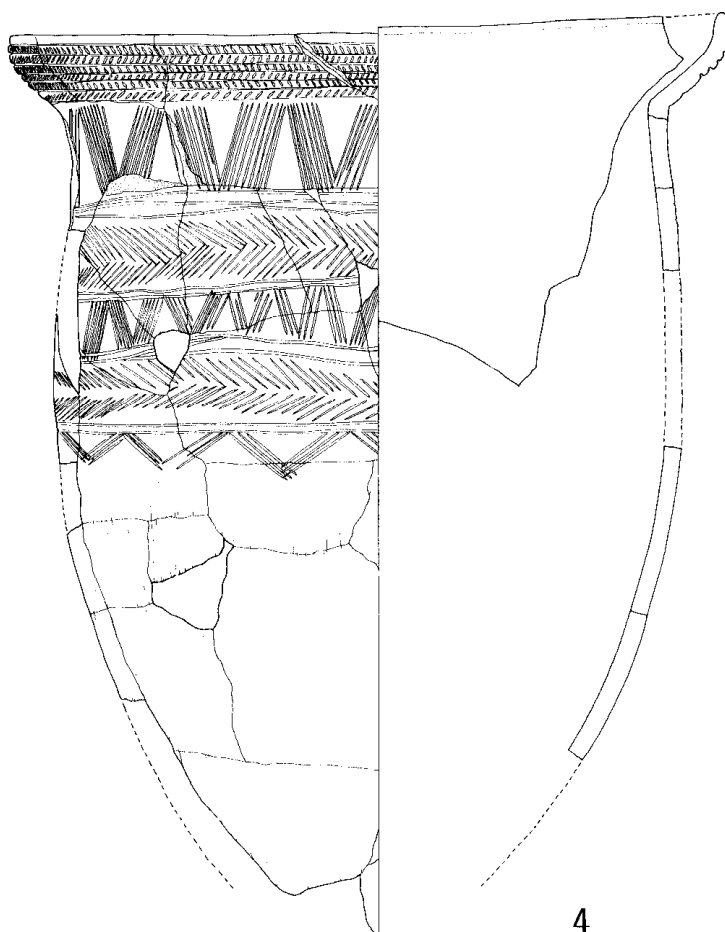


2

0 10cm



3



4

図-1

2段の凸帯をもつ。その上もしくは間に刺突文列が4段施され羽状を呈する。胴部文様は、2本単位の沈線による鋸歯状文、右下がりの斜行沈線、左下がりの斜行沈線、鋸歯状文、左下がりの斜行沈線、右下がりの斜行沈線が順次施され、横走する沈線によって区画されている。器面の色調は褐色を呈する。整形は、器面が縦方向に、裏面上部は横、より下は縦方向にへら磨きされている。補修孔が5対ある。

3は、1971年に実施された釧路市貝塚町1丁目遺跡第2次調査の際に出土したものである。遺構には伴件しない。口縁部及び胴部約 $\frac{1}{3}$ を欠くが大型の鉢形土器で、現器高33.0cm、口径29.0cm（推定）、底径8.9cmを計る。胴部の文様は4帯に分帯され、上から3～4本単位の沈線による鋸歯状文、横走綾杉文、縦沈線と鋸歯状文の組み合わせ、横走綾杉文が施され、各々は横走する沈線によって区画されている。器面の大半は黒褐色の色調を呈し、裏面とともにへら磨き整形がなされている。

4は、釧路市富士見町から出土したものである。胴部の約 $\frac{1}{3}$ と底部を欠損している。口径33.5cm、現器高42.4cmを計る大型鉢形土器である。口縁部は5段の凸帯をもち、6段の刺突文列がめぐらされている。その直下からは、鋸歯状文、横走綾杉文、鋸歯状文、横走綾杉文、鋸歯状文と各々の間を区画する横走沈線文を施し胴部の文様としている。器面の色調は褐色を呈する。整形は、器面が縦方向に、裏面上部は横方向、より下は縦方向にへら磨きされている。

5は、1964年に釧路市緑ヶ岡遺跡より出土した土器である。高さ26.5cm、口径26.5cm、底径8.0の大きさを計り、口縁部は一端外反し、途中からはほぼ垂直に立ち上がる。口縁部には浅い凹線が3条施されているが、ところによっては消失する。刺突文列は4段めぐらされている。3段目は途中までで、部分的に3段となる。胴部文様は、横走沈線で区画された中に10本前後の沈線を単位とする鋸歯状文が2段施され、上段と下段で菱形を形作っている。器面は黒褐色の色調を呈し、縦方向にへら磨き整形されているが、粗雑であるため粘土紐巻きあげの凹凸を残す。裏面は、上から下まで横方向の整形痕が観察される。底部に *Quercus*（コナラ属）の木葉痕がある。

6は、釧路第一高等学校より寄贈された資料である。釧路市貝塚町1丁目遺跡採集とある。高さ27.1cm、口径25.9cm、底径6.1cmを計る大型の鉢形土器である。底は小さく、且つ丸味をもち平坦面には直立しない。器面の色調は黒褐色を呈する。口縁部は外反し、口径上に浅い沈線が半周する。器面は、口径直下に3段の刺突文列をもち、その下に2帯の文様帯をめぐらす。上段は縦沈線

の集合を横沈線3本で2分した文様、その間は右下がりの斜行沈線と左下がりの斜行沈線を交叉させたいわゆる斜交叉文が2段配されている。下段は幅が狭く、鋸歯状文がめぐらされている。上下段の間及び下縁は3本を単位とする横走沈線で区切られている。器面は縦方向に、裏面は横方向にへら磨き整形がなされている。文様帯の部分は、縦もしくは斜方向に刷毛目痕が観察される。なお、器面の整形は粗雑で、粘土紐巻き上げ痕を残す。

7は、釧路市緑ヶ岡遺跡出土である。高さ22.0cm、口径18.2cm、底径6.8cmの大きさを計り、明褐色の色調を呈する。口縁は外反し、隆起帯が1段施され、刺突文列が2段めぐらされている。胴部文様は、鋸歯状文、横走沈線、短い沈線による鋸歯状文が施文されている。整形は、器面文様帯直下は横方向、さらに下は縦方向に、裏面上部は横方向、より下は縦方向にへら磨きされている。底には木葉痕が残されている。*Quercus*（コナラ属）。

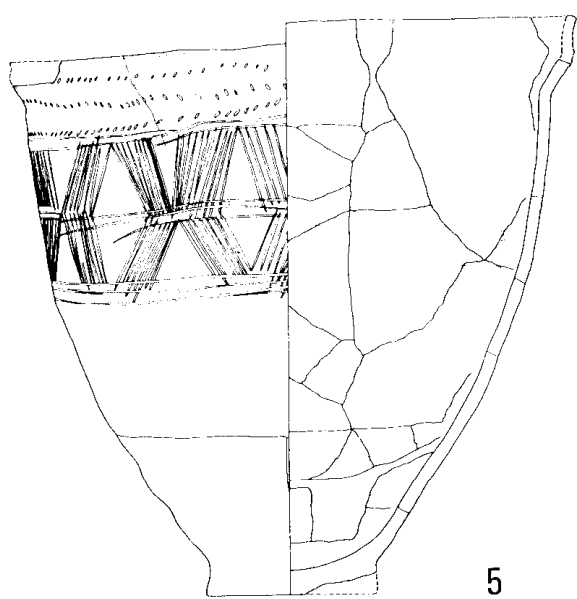
8は、釧路市内出土とある。高さ19.8cm、口径20.8cm、底径5.9cmの大きさを計る鉢形土器で、口縁部には刺突文列が2段めぐらされている。その直下は7～8本の縦沈線もしくは斜行沈線を施す。不規則で、ところによっては鋸歯状を呈する。下縁は横走する3本の沈線で区画されている。器面の色調は黒褐色を呈し、整形は粗雑で粘土紐の巻き上げ痕が観察される。補修孔が3対穿たれている。

9は、釧路市緑ヶ岡遺跡出土である。高さ9.8cm、口径16.5cm、底径5.4cmの大きさを計る高坏形土器である。器面は明褐色を呈し、横走する綾杉文が連続して施されている。内面上部は横方向、以下は縦もしくは斜方向にへら磨き整形されている。脚部は短い。

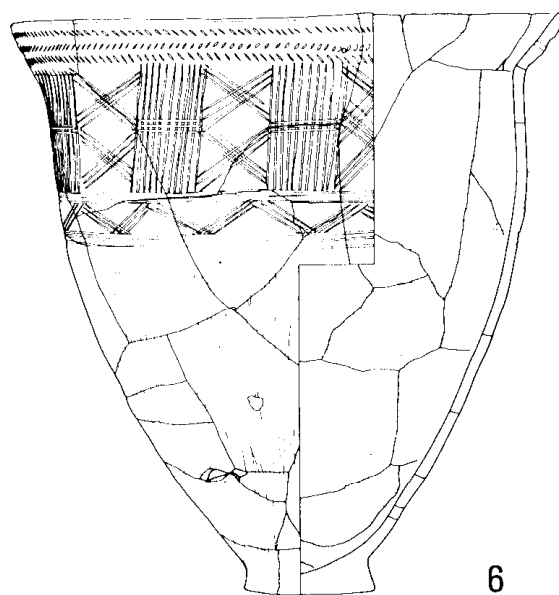
10は、北見枝幸出土とある。高さ9.2cm、口径17.8cm、底径6.2cmの大きさを計る。器面の色調は黒褐色で、刷毛目による整形が縦・横・斜方向にされ文様となっている。内面はへら磨き整形され、中央部は窪んでいる。9同様脚部は短い。

11は、釧路市内から出土したものである。高さ11.6cm、口径20.3cm、底径6.0の大きさを計る。器面は、明褐色の色調を呈し、刷毛目による整形痕を浅く残す。文様は、横走する綾杉文が連続して施されている。内面は磨かれて光沢を有し、中央部は窪んでいる。脚部は粗雑さを残し、2条の凹線がめぐらされている。

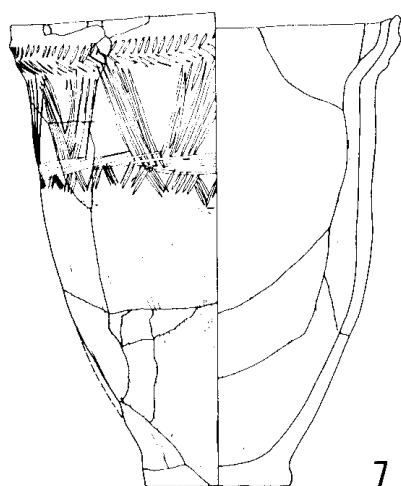
12は、釧路市緑ヶ岡遺跡から出土した土器である。口縁部及び胴上半部過半が現存する。推定口径34.0cmの大きさを計る大型鉢形土器で、口縁は単純に外反し、刺突文列が3段めぐらされている。胴部文様は図示した様に、



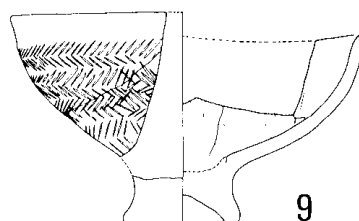
5



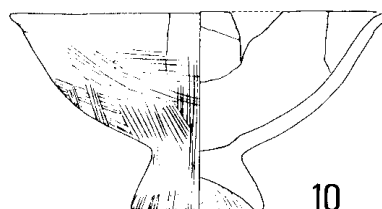
6



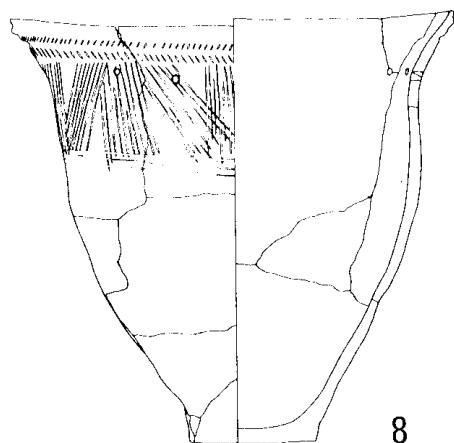
7



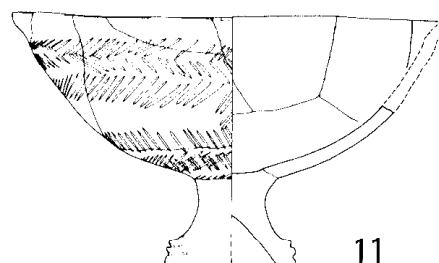
9



10



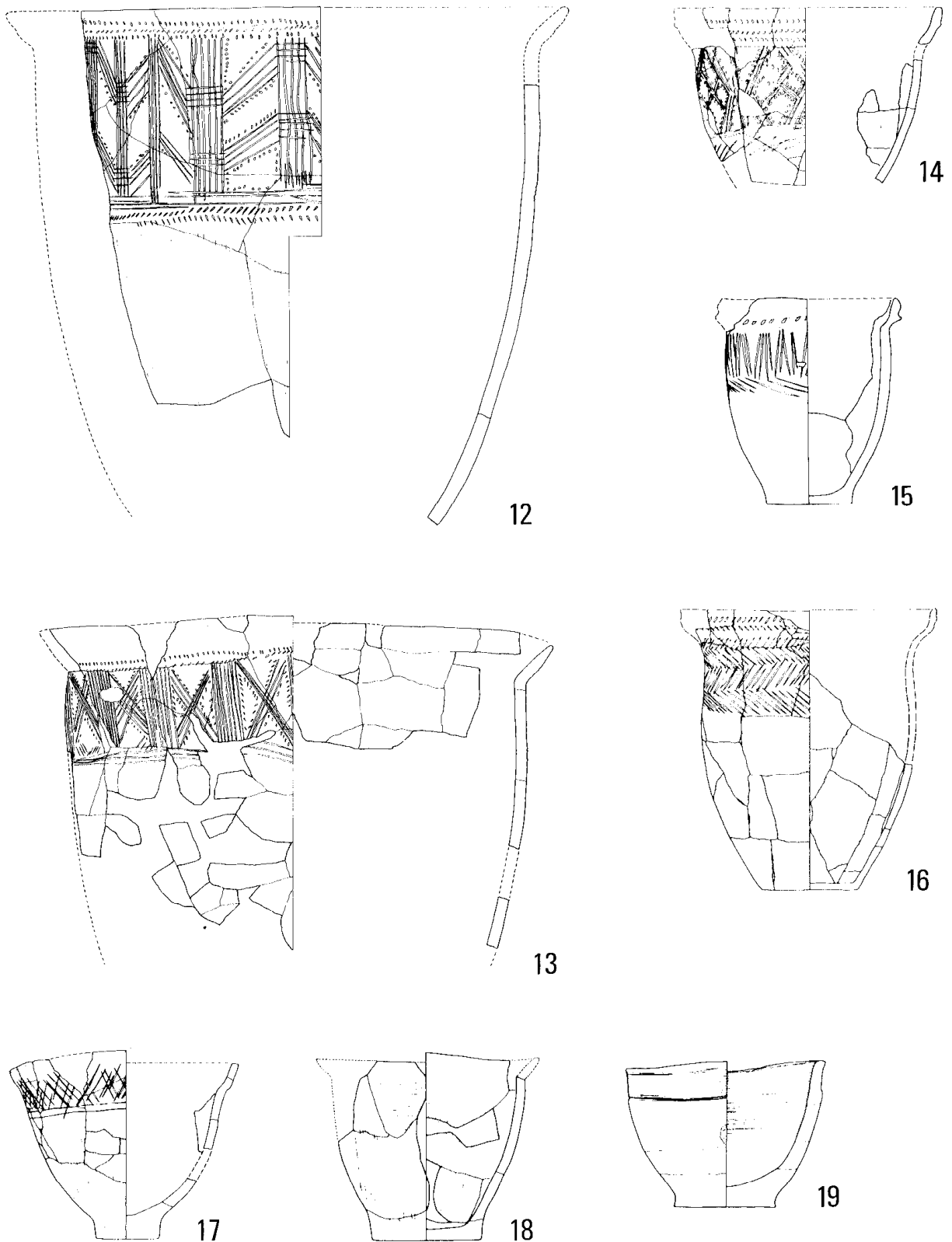
8



11

0 10cm

図-2



0 10cm

図-3

縦沈線、横沈線、斜行沈線によって組み合わせられ、各辺に沿って刻点文が施されている。下縁は横走る沈線で区画し、さらに下には口縁部と同様の刺突文列が2段施文され羽状を呈する。器面は黒褐色ないし明褐色の色調を呈し、裏面とともにへう磨き整形されている。前者は縦方向に、後者上部は横方向、より下は縦方向にされている。

13は、釧路市東釧路遺跡出土である。胴下半部を欠く。口径31.0cm。口縁部は単純に外反し、口頸部附近に刺突文列が2段走る。器面の色調は灰褐色を呈する。胴部文様は、8本前後の縦沈線と3～4本単位の斜交叉文で組み合わせられ、各辺に沿って刻点文が施されている。下縁は3本の横走沈線によって区切られている。器面は縦、裏面は横方向に整形されているが、粗雑である。

14は、厚岸町子野日公園から採集された土器である。口縁部の過半及び底部を欠損し、色調は黒褐色を呈する。口径16.0cm。口縁部には1段の隆起帯をもち、それを挟んで上に1段、下に2段刺突文列が施されている。胴部の文様は、縦沈線で区画した中に斜行沈線で菱形を形作り、さらに短い斜行沈線で4分割し、各辺に沿って刻点文が並ぶ。下縁には横走る2本の沈線がめぐり、より下には斜行沈線が施されている。裏面の整形は、他の多くと同様上部が横、より下は縦方向になされている。

15は、釧路市緑ヶ岡出土とある。高さ12.3cm、口径10.4cm、底径5.1cmの大きさを計り、黒褐色の色調を呈する。口縁部には1段の隆起帯が作出され、その上に刺突文列がめぐらされている。胴部文様は、2本単位の沈線による鋸歯状文と右下がりの斜行沈線が施されている。器面調整は粗雑である。底に木葉痕を残す。Quercus（コナラ属）。

16は、1970年に釧路市貝塚町1丁目遺跡から出土した土器である。高さ16.6cm、口径15.3cm、底径5.0cmの大きさを計り、胴部は若干脹を見せ、底部はくびれることなく底に達する。口縁は一端外反し、途中から角度を変えて立ち上がる。口縁部には2段の低い隆起帯が横走り、その上に刺突文列が施されている。胴部は、横走る綾杉文が2段めぐらされている。器面は黒褐色の色調を呈し、浅い刷毛目痕が縦もしくは斜方向に残されている。裏面はへう磨き整形されており、上部は横方向、下部は縦方向である。

17は、東釧路遺跡第5号竪穴出土土器である（澤・宇田川 1967）。報告には写真が掲載されている。高さ13.8cm、口径13.8cm、底径3.8cmの大きさを計る小形の土器で、色調は黒褐色を呈する。口縁は若干外反する。文様は胴部に限られ、左下がりの斜行沈線に右下がりの斜行

沈線を重ねて施し、斜格子目状の文様を作出し、下縁は横走る2本の沈線で区切られている。器面は、縦方向のへう磨きによる整形痕が残されている。

18は、釧路市内で得られた資料である。高さ10.7cm、口径13.5cm、底径6.5cmの大きさを計り、口縁は単純に外反する。器面は黄褐色の色調を呈し、刷毛目による整形が横方向と縦方向になされている。裏面はへう磨き整形されている。上部は横、下部は縦方向である。

19は、小樽市手宮手宮小学校敷地出土とある。高さ8.7cm、口径11.9cm、底径6.1cmの大きさを計る。器面の色調は灰褐色を呈しやや赤味を帯びる。口縁部には、幅1.7cmの刷毛目が横走しており、浅く窪んでいる。器面はほとんど整形されておらず、粘土紐の巻き上げによる重なり合いが明瞭に残されている。粘土紐の幅は1.2～2.3cmである。裏面は口縁より中ほどまで刷毛目痕を残す。

以上、各々について記述して来た。これらをいままでの編年に対比すれば、1は口縁部形態に問題も残るが、菊池の擦文c、佐藤の擦文土器Ⅳの前半に、藤本のg類、宇田川の後期にあたろうか。2・3・4は菊池のD、佐藤Ⅳの中頃、藤本のh、宇田川の後期、石附のVにあたる。5・6は菊池のD、佐藤Ⅳの後半、藤本のi、宇田川の晩期に、7・8・12～15は佐藤Ⅳの終末、藤本j～l、宇田川の晩期にあたろう。9～11は高坪で、藤本の編年によればc～h間に置かれている。図示した3例は、器面の文様、脚部・口縁部形態などを組み合わせると、3例とも異なる。時間差であろうか。16は文様が複段化されていることや、胴下半部の形態がオホーツク系文化の影響を受けていると思われることから、佐藤Ⅳの前半に置かれよう。17は佐藤Ⅴの前半、宇田川の後期にあたる。この様に対比して見たが、釧路地方の擦文土器は、器形や文様の点で他地域とはやや異り、無理な面もある。いずれにせよ誤りは、将来正すことにして次の章へ移りたい。

### III

釧路地方のいわゆる北大式土器については、澤四郎によって細岡のグループ→シュンクシタカラⅢ群→下鶴別のグループと変遷づけられている（澤他 1963）。この後、大沼忠春は北大式土器の成立過程を「シュンクシタカラⅡ群Ⅲ類→細岡→殉公碑公園五群→シュンクシタカラⅢ群という一つの系列が想定される」と後北式からの序列を示した（大沼 1970）。その後、大井晴男はシュンクシタカラⅢ群の一部を擦文0とし、擦文文化の中を含めた（大井 1970）。一方、佐藤達夫はシュンクシタカラ遺跡及び殉公碑公園遺跡の資料を基に北大式土器の観点

から5類に分類し、順次推移するとしている(佐藤 1972)。これら断片的な資料で、かつ北大式土器とされて来たものの一部を擦文土器に含めるか否か問題も残るが、釧路地方でも後北式から北大式を経て擦文期に至る推移はスムーズにたどれそうである。

釧路地方出土で古手の擦文土器と考えられているのは、釧路市緑ヶ岡遺跡出土土器(大井 1972 Fig 296-1)と標茶町塘路出土土器(同 Fig 296-2)及び弟子屈町下鎚別遺跡3号竪穴出土土器(澤・宇田川・豊原 1971 第12図7)に限られる様である。前2者は佐藤編年Ⅱの前半に位置づけられている(宇田川 1979)。後者も近い位置に置かれようか。

これに続く段階、つまり佐藤編年のⅢとされる資料は「古式と末期の中間に位置する形式を出土する遺跡は、ないか、あってもきわめて少ないものであるらしい。」(西・澤 1970)と指摘されて来た。すなわち、菊池の擦文BとC、藤本のc～g類である。この段階に含まれると思われる資料が散点的に出土している。白糠町和大別遺跡第16号住居址(富水 1968a 第34図3)、同第19号住居址(富水 1969 第3図19-7)、釧路市貝塚町1丁目遺跡第18号住居址(澤・西編 1974 第29図5)、弟子屈町矢沢遺跡(澤・松田編 1977 第28図8)などである。いずれも胴部破片のため正確を期し難いが、佐藤のⅢには含まれよう。したがって、釧路地方で擦文期の遺跡が突然断絶したとするに足る根拠に乏しい現在、早急に論断を下すことにはならないだろう。

一方、オホーツク系の文化、トビニタイ土器群(菊池 1972)を出土する遺跡は18ヶ所(西 1970 + 1白糠町和大別遺跡)知られている。トビニタイ土器群の編年的位置づけについては、なお問題も残されているが、斜里町ピラガ丘遺跡(金盛 1976)、弟子屈町矢沢遺跡などから、佐藤編年のⅢ頃に併行することが予測される。釧路地方では、佐藤Ⅲの擦文土器を出土する遺跡よりもトビニタイ土器群を出土する遺跡の方が多く、かつ後者は遺構に伴出した例もあり、優位である。したがって、トビニタイ土器群の進出により、佐藤Ⅲの勢力が弱まった、あるいは駆逐されたと考えることもできそうである。しかし、藤本強の指摘する様に「オホーツク文化の資源獲得のシステムがなんらかの要因で崩れ、それを受け一定のシステムを作るべく模索している」(藤本 1979)段階の文化が、果して一定のシステムを持っていたと考える文化を駆逐することができるであろうか、という疑問も残る。ただし、これまでの素材から釧路地方の擦文期の集団が明瞭になるのは、佐藤Ⅳの中頃であり、それ以前の人間集団が住んでいないか、もしくは希薄であれば入り

込む余地もあろう。いずれにせよ今後の調査を待ちたい。

次いで出現するのは1に示した様な土器である。他に白糠町和大別遺跡第16号住居址(富水 1968a 第34図1、2)出土例が上げられる。また、16も前後する位置を占めるものとみて大過なからう。

後続する土器群としては「紋様帯が一般に三帯に分帯される。しかしより多帯の例もある。斜交叉紋、鋸歯状紋、羽状紋、縦線紋等が種々に組合わされる。」(佐藤 1972)と説明されるグループである。図示した2～4、白糠町和大別遺跡第19号住居址(富水 1969 第3図19-9)、釧路市貝塚町1丁目遺跡第18号住居址(澤・西編 1974 第29図6)。厚岸町下田ノ沢遺跡第2号住居址(澤他 1972 第17図2)・(第27図14)などが上げられる。釧路地方の擦文土器はこの段階で明瞭になり、拡がりを持つようである。

佐藤Ⅳの後半とされる土器群を出土する遺跡は非常に多くなり、調査された遺跡の大半はこの中に含まれる。音別町ノトロ岬遺跡、白糠町和大別遺跡、釧路市緑ヶ岡S T V遺跡、厚岸町下田ノ沢遺跡、釧路市貝塚町1丁目遺跡、釧路市北斗遺跡、弟子屈町矢沢遺跡、釧路市興津遺跡などがあげられる。藤本強や佐藤達夫によって細分されており、釧路地方出土例もかなり変化があり、細分されるものと思われる。

終末期の資料と考えられるのは、図示した17、音別町チノミ遺跡、釧路市緑ヶ岡S T V遺跡5号址、釧路市東釧路煉乳工場裏竪穴出土土器(宇田川 1979)などがあげられよう。

#### Ⅳ

以上、狭い視野ながら釧路地方の擦文土器を概観してみた。その結果は、先に西幸隆・澤四郎によって指摘されている如く、擦文期後半の資料が大半を占めることは疑えないところである。この様なあり方から、釧路地方も含めて道東地方に擦文期後半の遺跡が多いことについて大井晴男は、「擦文文化の前半の時期に、そこにあった人口が相対的に小さかったことを意味するのではあるまいか。それは、同時期の道央以南と対比したときにそうであり、また道東における擦文文化後半期の人口と対比したときにも同様であろう。道東部にかぎってみれば、擦文文化の前半と後半における推定される人口差は、…道央以南からの大規模な人間集団の流入にその原因が求められよう。」とする見解を述べている(大井 1972)。この見解は、現在の資料を見る限り妥当なところである。だが、釧路地方では、調査された遺跡数は、確認されている遺跡数に比べて極めて少なく、また相次ぐ調査で新

資料も増加し、さらに検討を加えるべき問題も内包されつつあるように考えられるので、如上の見解を即是とするのは、早計であろう。

冒頭にも述べた通り、資料整理の途中であり、釧路地方の資料について乏しい素材のため詳述できなかった。今後さらに整理を進めた段階で再吟味し、正確を期した

いと思う。

最後に、本稿を草するにあたり種々ご教示を得た澤四郎先生、宇田川洋氏、西幸隆氏、土器底面の木葉痕について同定をお願いした新庄久志氏に対し、ここに銘記して、深く感謝申し上げる。

## 引用参考文献

- 石附喜三男 1968 擦文式土器の初現的形態に関する研究 札幌大学紀要
- 石附喜三男 1969 擦文土器とオホーツク式土器の融合・接触関係 北海道考古学第5輯
- 宇田川洋 1977 北海道考古学講座7 擦文期 北海道地方史研究13
- 宇田川洋 1979 70年代擦文文化の研究 どんめんNo22
- 大井晴男 1970 擦文文化とオホーツク文化の関係について 北方文化研究第4号
- 大井晴男 1972 北海道東部における古式の擦文式土器について 常呂
- 大沼忠春 1970 釧路村細岡出土の北大式土器 釧路市立郷土博物館々報No204
- 金盛典夫 1976 ビラが丘遺跡－第Ⅲ地点発掘調査報告－
- 菊地徹夫 1970 擦文式土器の形態分類と編年についての一試論 物質文化15
- 菊地徹夫 1972 トビニタイ土器群について 常呂
- 佐藤達夫 1972 擦紋土器の変遷について 常呂
- 澤四郎他 1963 北海道阿寒町布伏内シュンクシタカラ遺跡発掘報告 北海道阿寒町の文化財 先史文化篇第一輯
- 澤四郎他 1963 北海道阿寒町殉公碑公園遺跡発掘報告 北海道阿寒町の文化財 先史文化篇第一輯
- 澤四郎他 1965 北海道阿寒町下仁々志別堅穴住居址発掘報告 阿寒町の文化財 先史文化篇第二輯
- 澤四郎・宇田川洋 1969 北海道東釧路遺跡の堅穴発掘報告 考古学雑誌第55巻第1号
- 澤四郎・宇田川洋・豊原熙司 1971 弟子屈町下鎗別遺跡発掘報告
- 澤四郎編 1972 釧路市緑ヶ岡S・T・V遺跡発掘調査報告 釧路市立郷土博物館紀要第1輯
- 澤四郎他 1972 厚岸町下田ノ沢遺跡

- 澤四郎・西幸隆編 1974 釧路市貝塚町1丁目遺跡調査報告
- 澤四郎・西幸隆編 1975 釧路市北斗遺跡調査概要
- 澤四郎・松田猛編 1977 弟子屈町矢沢遺跡調査報告－第一次調査－
- 澤四郎編 1979 釧路市興津遺跡発掘報告
- 澤四郎・西幸隆 1979 白糠音別両町の遺跡 釧路市立郷土博物館々報No255
- 東京大学 1964 擦文土器 オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻
- 富水慶一 1968 a 和天別川河口堅穴住居址群遺跡調査報告(第1次調査) 北海道白糠町の先史文化第二輯
- 富水慶一 1968 b 和天別川河口堅穴住居址群遺跡調査報告(第2次調査) 北海道白糠町の先史文化第三輯
- 富水慶一 1968 c 刺牛チャシコツの出土遺物 北海道白糠町の先史文化第二輯
- 富水慶一 1969 和天別川河口堅穴住居址群遺跡調査概要(第3次調査) 北海道考古学第5輯
- 富水慶一 1970 白糠郡音別町の擦文文化遺跡調査概報 北海道考古学第6輯
- 西幸隆 1970 釧路地方のオホーツク式土器について 釧路市立郷土博物館々報No207
- 西幸隆・澤四郎 1975 釧路湿原周縁の遺跡分布 釧路湿原総合調査報告書
- 藤本強 1979 トビニタイ文化の遺跡立地 北海道考古学第15輯
- 藤本強 1972 常呂川下流域の擦文土器について 常呂
- 山本文男編 1977 昆布森中学校裏遺跡発掘調査報告書 釧路村文化財調査報告2